実践報告

チェンマイ大学看護学部海外研修報告

奈良県立医科大学医学部看護学科、チェンマイ大学看護学部
勝井伸子　守本とも子　Phanida Juntasopeepun

The Report of The Study Tour at Chiang Mai University Faculty of Nursing

Nobuko Katsui*　Tomoko Morimoto*　Phanida Juntasopeepun**
*Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University
**　Faculty of Nursing, Chiang Mai University

1．はじめに

最近の看護系大学では、ほぼ半数の大学で国際看護関連の授業科目が開講されていることはすでに報告されている（川越　2002、0’Brien 2006)。また、海外研修に関しては、主として語学研修として実施されていたが、しだいに看護教育の視点や国際的相互交流の視点を取り入れるように変遷した例（平野　2004）や、「海外生活を体験して豊かな国際感覚を身につけるとともに、アメリカの看護・医療の現場を視察する」といった英会話と見学を組み合わせ、異文化体験を中心とした例（曽田　2000）などさまざまな形態で実施されている報告がある。三重県立看護大学の調査によると、約半数の大学で何らかの海外研修が行われ、北米地域とアジア地域への研修が多いこと、参加学年は３年、２年、４年、１年の順であったこと、単位認定については、半数以上で国際看護学などの名称で単位の認定が行われ、８割近くの大学で「すべて通訳あり」「一部通訳あり」と何らかの通訳をつけていることなどが報告されている（0’Brien 2006)。

2．本学での国際看護論の位置づけと変遷

本学看護学科の前身である奈良県立医科大学看護短期大学部では、平成８年の創立以来、看護学の発展科目の選択科目として国際看護論を開講し、前期授業とアメリカへの海外研修で２単位の単位認定を行ってきた。初年度は看護教員と英語担当教員が講義担当・引率を行ったが、看護学の発展科目という性格付けから、平成11年度以降は看護教員のみの講義、引率とし、現地で通訳を雇用する形態をとってきた。

平成16年度の看護学科開学に伴い、英語文献講読、ドイツ語、中国語、韓国語、国際情勢論、国語表現法と並ぶ国際理解科目の選択科目として、新たに国際看護論を２単位で開講することとなった。講義内容も新たに国際理解の科目として異文化理解に焦点をあてた内容として文学、文化研究、文化人類学、看護、公衆衛生、心理学などさまざまな専門の講師陣による学際的科目として講義を展開した。　研修先は、非西洋圏にある看護大学ということもあり、アジア地域のタイ国チェンマイ大学看護学部を選んだ。

3．研修前の講義

前期期間において前述の趣旨のもとにオリエンテーションを含めて１４回の講義を行った。このうち５回は英語で講義が行われた。看護の国際化・看護師不足と国際移動・看護教育の国際比較を外国人の国際看護学専門教員が英語で講義を行い、必要に応じて英語教員が通訳を行った。文化人類学専門家による国際人道支援の実際・文化人類学からみる医療・伝統医療およびタイに関する講義、公衆衛生専門家によるカンボジアにおける公衆衛生問題の講義、PTSDの専門家による講義を行った。文化研究の立場から国内の異文化・異文化理解とジェンダー・痛みのカルチュラルスタディーズを英語教員が担当し、アメリカ看護理論の文化的背景と痛みの

異文化看護は本学看護教員が講義を行った。

4．チェンマイ大学研修への準備

最も時間と労力を要したのは、チェンマイ大学看護学部との研修の交渉であった。実施前年度にチェンマイ大学看護学部と国際交流協定を結んだ上で、海外交流担当責任者 Dr. Phanida Juntasopeepun 氏との連絡で計画立案し、事前協議の殆どをｅメールで行った。使用言語が英語であったため、本学英語教員がこの業務に携わったが、日程、講義見学内容等細かい調整に膨大な時間と労力を要した。研修費用の徴収支払いもできるだけ安価に学生が研修に参加できるよう配慮した結果、６で述べるように複雑な方法を取った。学生の参加可能日程とチェンマイ大学のスケジュールとの日程調整は頻回な修正を要し、出発直前まで連絡に追われた。現地の通貨事情が不安定だったこともあり、費用の支払い、両替について、学生への連絡、現地への確認など、注意を要する点が多かった。

5．海外研修

チェンマイ大学へは本学より担当教員２名、及び自費参加の非常勤講師２名に学生１５名で計１９名が海外研修に参加した。海外研修スケジュールは次に示す表の通りであった。

表１　チェンマイ大学海外研修　日程表

8月	時間	項目
１９（日）		関西空港集合（午前９時）チェンマイ着、ホテルチェックイン、宿泊費支払い
２０（月）	終日	自由＊クーデター後急設された祝日の為、急遽事前に授業資料を依頼し、各自資料の予習を行った。
２１（火）	午前	講義：　チェンマイ大学看護学部概要　Dr. Wipada 学部長
	午前	講義：タイの医療制度　Dilaga Tripiboon
	午後	見学：地域コミュニティセンター見学（一次医療）Dilaga Tripiboon
	夜	チェンマイ伝統料理と舞踏鑑賞
２２（水）	午前	講義：タイにおけるエイズの現状 Dr. Chomnard Potjanamart
	午後	見学：コミュニティ病院でのエイズへの代替医療（二次医療）講師同上
２３（木）	午前	講義：タイにおける外傷ケア Dr. Suparat Wangsrikhun
	午後	見学：チェンマイ大学病院（三次医療）男性整形外科・救急　講師同上
２４（金）	午前	見学：地域老人クラブ活動　Dr. Totsaporn Khampolsiri
	午後	講義：タイにおける老年者ケア　Dr. Totsaporn Khampolsiri
２５（土）	終日	マヒドン祭（チェンマイ大学）見学、スーテップ寺院参拝
２６（日）	終日	象キャンプ見学　オーキッドファーム見学
２７（月）	午前	講義：タイの子供の健康状態 Malee Urharmnuay
	午前	講義：タイの子供の健康増進. Dr. Usanee Jintrawet
	午後	見学：グループ１：院内保育所・小児健診センター　講師同上 グループ２：小児 ICU, 小児病棟（感染症・非感染症）講師同上
２８（火）	午前	講義：タイにおける精神看護 Dr. Patraporn Tungpunkom
	午後	見学：チェンマイ精神病院　講師　同上
２９（水）	午前	講義：タイにおける補完・代替医療　Dr. Hunsa Sethabouppha
	午後	見学１：タイマッサージセンター　見学２：タイ伝統医療センター
	夜	お別れパーティ（学生主催）
３０（木）	終日	修了式　研修評価　看護学校舎見学　昼食会　午後　出発
３１（金）	午前	午前５時３０分関西空港帰着、解散

6．海外研修の諸費用

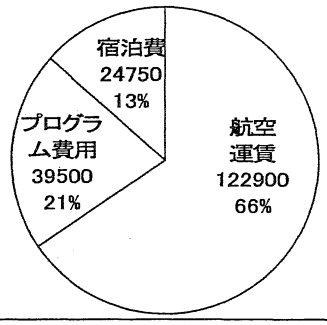
今回の海外研修の諸費用の支払いについては、一括徴収せず、研修プログラム費用は学務課徴収支払い、宿泊費は各自現地支払い、航空運賃は事前に学生個々の支払いと、３段階に分かれた。その理由は、できるだけ安価な費用での研修を可能にするためであった。

航空運賃は、燃料費の高騰と夏休み期間中であることから、全体の費用のうちもっとも大きな比率を占め、122,900 円を各自が指定された銀行口座に入金した。(図１参照)

チェンマイ大学に対して支払うプログラム代金は最大２５名までを限度とした総額支払いであったので、最終参加者の人数によって金額が変動するという問題があり、早期に金額を確定することが難しかった。研修プログラム代には昼食費、バス代、おやつ代、チェンマイ伝統料理と舞踊鑑賞を含み、総額は179940 バーツであった。当時バーツが急騰しており支払い時期を決めることが難しかったが、学務課の協力を得て集金・残金返金し、39500 円であった。

ホテルの宿泊費は各自タイバーツで支払った。バンコク乗り継ぎ時に両替したほうが、為替レートは有利であった。宿泊代は11 泊分朝食込み、二人部屋で一人あたり 660 バーツ、為替レートによるが 23100 円～26400 円代で両替できていたと思われる。学生の追加負担は、土日の費用および平日の夕食であったが、現地は物価が安いので夕食は 300～500 円でまかなえる程度であった。

図1．海外研修費 187150円



7．学生による研修評価

1）チェンマイ大学実施分　８月３０日実施

a)研修満足度評価

(大変満足した＝４、ある程度満足した＝３、やや不満＝２，不満＝１）　(n=12)

表２

項目	平均(SD)
①　研修全体	3.4(±0.5)
②　スケジュール	3.2(±0.7)
③　学習目的と合致していた	3.7(±0.5)
④　タイの学生からの援助	3.8(±0.3)
⑤　宿泊施設	3.2(±0.8)
⑥　ﾁｪﾝﾏｲ大教員らからの援助	3.8(±0.4)
⑦　レクリエーション活動	3.2(±0.4)
⑧　大学が手配した交通機関	3.8(±0.4)
⑨　講義見学の構成	3.1(±0.7)

③学習、④学生、⑥教員、⑧交通機関については満足度が高いが、②スケジュール、⑦レクリエーション、⑨プログラム構成にはやや不満があることが推察される。

b)自由記載内容

自由記載事項は英語と日本語の両方で書かれていたが、ほぼ以下の内容に集約される。

表３

（1）　文化の違い

・医療面の違いだけでなく、社会・経済・文化の面からも違いを理解することが大切である。

・違いを知るだけでなく、その根拠も知ることが大切である。

・文化をとらえるということの意義について深く学べた。

・世界との比較であらためて日本をみることができて、文化的背景や国民性を考えて看護していかないといけないということを学んだ。

・海外で暮らすこと、違う文化の中で過ごすことについて考えさせられた。

・実際の町の様子や環境を体感することで、どういったことが医療とつながってくるのか、どういったことが必要であるのか考えられるようになってきた。
・タイの文化・風習は日本とは全く違うので同じ医療はできないと感じた。
・他国の文化に触れる時は、日本の一般的知識を用いて見るのではなく、その国の文化をきちんと理解した上で考えることが大切であることを学んだ。
・地域特性に応じた看護介入が必要だと考える。
・世界にはたくさんの違った文化があり、今おこっているありのままの現状を知る事の大切さを学んだ。
・決して自分の物差しでみてはいけないと思った。
・タイの医療について学ぶことはとても困難だったが、異文化を学ぼうとすることはとても大切なことであり、また必要なことであると感じた。
・お互いの医療について、文化を通じて学ぶことは必要であり、視野を広げるのに役立つと思った。
・この研修は文化を意識して、とてもうまく構成されていると思った。

（2）医療システムの違い

・コミュニティケアが充実しており、人々がみんな家族のように接していた。
・コミュニティセンターの見学から、将来保健師として役立てる知識を得られた。
・医療器具は高度ではないかもしれないが、器具がないかわりに代用してケアを行っていた。このような看護は本当に大切だと感じた。日本では十分な器具などがある環境になれすぎているため、いざというときに動けないかもしれないし、こういったことを学ぶのは大切だと考える。
・タイと日本の違いから、タイの良い点をそのまま日本に持ち込めない。

（3）疾患とその背景

・タイの交通事情が死亡原因に大きく関わっていることを知った。
・エイズなどについても知ることができた。日本と全く違う疾患があることを知った。

（4）伝統医療・代替医療

・タイでは伝統医療が続けられ、人々の経済面、身体面、精神面を十分に考えようという働きがなされていることに感心した。
・タイでは西洋医療と伝統医療・代替医療が共存していることはとても良い事であると感じた。
・西洋医学で解決できないこと、伝統医療では解決できないことを両者がカバーしあうことはすばらしいと思った。
・伝統医療は人々にとっては、精神面からのケアがされており、効果があることがわかった。
・　文化・習慣にあった医療を提供していくことの大切さを学んだ。
・伝統医療である自分自身でもできるようなマッサージを体験できてよかった。
・我々も日本の伝統医療をとりいれるべきではないか。

（5）英語の運用能力

・英会話は相変わらず苦手なままだが、苦手意識を持ちながらもしっかり聞き取ろうとし、タイに来た当初よりは理解できるようになった。
・研修に参加して、自分の英語力の乏しさを実感して、まず英語を勉強しようと思った。

（6）感謝

・学生のみなさんや老年クラブのみなさんが歓迎してくれて感謝・感動した。
・英語は苦手ながらもチェンマイの学生と交流でき、多くのもてなしを受け、楽しく過ごせたことは感謝の気持ちでいっぱいである。
・タイの人の優しさを感じた。私も人に対して思いやる事を常に意識したい。
・国民性としての優しさ、寛大さやもてなしの心を学んだ。

・どの講義も見学もすべて重要で興味深く、皆さんの親切に深く感謝している。
・来られたことに深く感謝している。

（7）週末スケジュール

・週のどこかで休日があればよかった。
・週に1回は半日でもいいから休みが欲しかった。少しハードスケジュールすぎた。
・ウィークディのスケジュールでは元気にこなせたが、週末は疲れをとるのに休養が欲しい。
・週末のプログラムがあいまいだったのがすこし残念だった。

以上の自由記載から考えると、異文化理解と医療について展開した科目の研修としては、ふさわしい経験であったと言える。

2）帰国後奈良医大実施分　10月10日実施

帰国後、編入生の実習終了を待って匿名によるアンケートを実施。海外研修に関する評価項目及び結果は以下の通りである。

・評価項目の①から⑪までは、現在看護学科で実施している授業評価の質問項目と同じものであり、授業、見学引率を行ったチェンマイ大学教員に対する質問項目である。
・⑫から⑰までは、海外研修固有の質問項目として尋ねたものである。
・⑱から⑳までは、医科大学の授業評価要のCのカテゴリー3項目を本学引率教員について尋ねたものである。チェンマイ大学で対象となった教員は8名、本学引率教員は2名である。

回答は（5　とてもそう思う　4そう思う　3　どちらとも言えない　2　あまりそうは思わない　1　そう思わない）の5段階である。評価の平均と、その標準偏差を表4に示した。

①　から⑫までの海外研修の講義見学に関しては概して満足度が高かったと考えられる。最も満足度が低かったのは休日の計画、研修期間の時期および学年配当であった。それに対して研修期間の長さは満足度が高かった。この4点について、自由記述を集約すると、およそ次のような点が挙げられていた。

(表5参照)

表4　（n＝13）

		平均	(SD)
①	視聴覚教材、プリントを工夫していた	4.3	(±0.7)
②	学生の質問に応ずる姿勢があった	4.5	(±0.6)
③	学生の理解度を把握するよう努めていた	4.4	(±0.5)
④	論理的にわかりやすく説明されていた	4.3	(±0.6)
⑤	視聴覚教材やプリントをわかりやすく示した	4.1	(±0,7)
⑥	私は授業に関心を持ち積極的に臨んだ	4.4	(±0.5)
⑦	授業以外にも自己学習した	4.1	(±0.8)
⑧	授業にはまじめに取り組んだ	4.6	(±0.4)
⑨	授業はよく理解できた	4.2	(±0.6)
⑩	授業内容には満足している	4.0	(±0.8)
⑪	授業は役立つ内容であった	4.4	(±0.4)
⑫	教員の通訳は適切であった	4.7	(±0.6)
⑬	研修期間の長さは適切であった	4.7	(±0.1)
⑭	休日の計画は適切であった	2.6	(±0.2)
⑮	研修期間の時期は適切であった	3.5	(±0.2)
⑯	学年配当は適切であった	3.5	(±0.2)
⑰	宿泊施設は適切であった	4.2	(±0.2)
⑱	引率教員の教育に対する意欲を感じた	3.6	(±1.5)
⑲	引率教員は公平な態度で学生を指導していた	3.9	(±1.4)
⑳	引率教員は学生を理解し尊重していた	3.7	(±1.5)

表5

(1) 研修期間の長さ

- 疲れがでたけど、学ぶためにはこのくらいの期間は必要だったと思う。
- もう少し短くてもいい、しかし講義内容はタイまでいっているのだから、あれだけの内容を聞けてよかったと思う
- 最初は長く感じたけど、振り返ると適切な期間だった。
- はじめは長く感じたが、その国の文化を知るには妥当だったと思う。
- 長くはなかった。帰国の２日前くらいから、やっと徐々にタイについてわかるようになったので、今回ほどの物理的な期間の長さタイに滞在することが必要であったと感じた。
- 期間はちょうどいい感じだった。
- 期間としては２週前後で良いと思う。
- ちょうど良かった。２週間あったから、ゆっくり勉強できた。
- ２週間は欲しい。体力的にも１週間で帰るのはしんどい。

(2) 研修の時期

- 編入生は地域実習前でストレスが高かったのではと思うがここしかないとも思う
- もっと忙しくない時期にはしてほしいが、他の期間にも色々授業があるので、なるべく違う次期に行きたいとは思うが実際には不可能だと思う。
- 国試や研究があるし、就職活動をはさむ時期なので今回の時期に行くのはきつかった。
- 就職試験時期であるし、編入生も実習前であるから四回生になる前の春休みが良いかと思われるが、総合実習の直前なので難しいかもしれない。

(3) 学年配当

- 研究、就職活動もあるため、きびしい。三回生が四回生になる前の春休みがよかった。（複数回答）
- タイについて学ぶためには日本の制度について理解していなければならなかった。実習が終わってからいくことに意味があると感じた。逆に編入生は三回生で履修しても大丈夫であると思った。
- 就職試験時期であるし、編入生も実習前であるから四回生になる前の春休みが良いかと思われるが、総合実習の直前なので難しいかもしれない。
- この時期は、就職試験もあり、行けない子がいた。一回生は入学したばかりで無理かもしれないけど、看護を勉強した二回生以降の学年なら、どの学年でも参加できるようにすべき。

(4) 休日の計画

- 休日に予定をみっちり組んであると、体力的に辛い、観光は一日あれば楽しめるし、いいと思うが、自由時間や参加自由にしてほしい。
- 象に乗ったりと楽しかった。でも疲れてる人もでてるから、自由参加にしたらいいと思う。
- 休日なのにプランが詰め込まれすぎてたように思う。もう少し体を休める時間がほしかった。
- 結果的には楽しめた。しかし、疲れがとれず、オプションがありすぎて忙しく、平日の授業にひびいた。観光は象だけでよかった。オプションは選ばせてほしかった。滞在期間が長かったので、ゆっくりする日をつくりたかった。
- 土日両日予定を入れるのではなく、どちらか１日は自由日として欲しい。
- 自由時間がなくしんどかった
- 計画は良かったが、全員で行くことが決まってる施設なら、その施設の入場料などは最初からプログラム代に入れておいて欲しい。プログラムの一環で行ってるのに、その場で払うのはおかしい。
- 全ての休日にオプションを付けるのが良いのかはわからない。

こうした学生の回答を見ると、研修の長さにはおおむね高い満足を示しているが、研修時期および学年にはいささか問題があることがわかる。学年配当については、臨地実習終了後が望ましいが、就職、研究が入る夏休みは最適ではないというところが学生の受け止め方であることが推察される。最初から海外研修に参加できないと考えている学生は授業のみの聴講をしており、そうした学生への単位認定はまったく行えないという問題も、今後の課題として検討を要すると思われる。

４年生の夏に研修を行う点の是非についても、春休みの研修が可能かどうかは、学務上困難が予想されるが、学年配当なども含めて、学生のコメントも考慮しつつ、今後検討すべき課題であると思われる。

休日の計画については、学生が明らかに不満であることと、その原因が休日のプログラムが多すぎることであることは、自由記述内容からも明らかであるので、今後の実施の際には考慮すべき点であると思われる。

研修出発直前には、タイについての基礎的な資料を作成し、自主的に簡単なタイ語のあいさつの練習の機会を持ったが、こうした時間も前期の講義の中に若干組み入れたほうが望ましいと思われる。

なお、本学の国際看護論の位置づけについては、看護大学での一般的傾向とは違った位置づけとなっている。戸村の報告にあるように、一般的には実践志向型の国際看護学教育は看護の専門領域の科目と位置づけられ、英語研修＋看護研修という形態でおこなわれる場合は英語の単位として認められている傾向にある。しかし、本学では国際理解の枠の科目の位置づけにありながら、海外研修では看護学の受講・見学の色彩が強くなっていることは、むしろ例外的であることも認識しておくべきことであると思われる（戸村　2004)。

最後にチェンマイ大学看護学部教員および見学先の施設の方々の実に暖かい歓迎があって初めてこの研修が実現したことを申し添えたい。

文献リスト

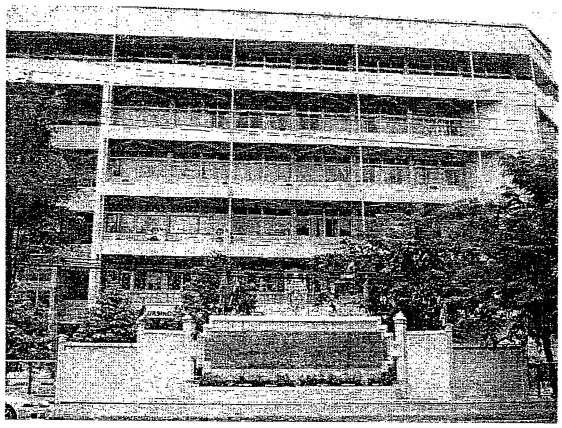
O’Brien, Myles, 馬場雄司、佐々木由香、河田みどり、大谷恵　：海外研修プログラムの評価と開発、看護系大学における学部学生の海外研修に関する調査報告（三重県立看護大学）2006。

川越栄子：　医学部、看護学部におけるESP教育の実態と将来像の系統的研究（科学研究費補助金採択課題研究実績報告）2002 http://seika.nii.ac.jp/cgi/lgn/MetMetaDetail.exe

曽田陽子、飯塚雄一：短期海外研修における異文化体験、島根県立看護短期大学紀要５巻 51-58、2000。

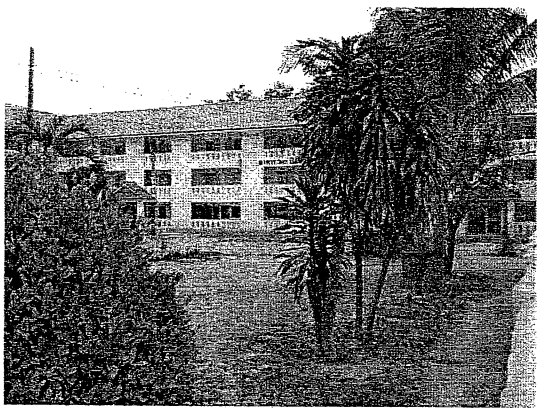
戸村美智子：看護系大学における国際看護学・国際保健学の教育プログラムに関する調査研究　（科学研究費補助金採択課題研究実績報告）2004。 http://seika.nii.ac.jp/cgi/lgn/SearchCoreDetail

平野美津子：看護学生のための海外研修－12年間の実践を振り返る－、聖隷クリストファー大学　紀要27号、49-59、2004。



チェンマイ大学看護学部校舎

持参した折り紙で鶴を折って交流



チェンマイ精神病院風景
(1000 床の大規模病院、立派な庭が印象的)

AIDS に対する代替医療としてタイマッサージを施術する看護師と本学学生

老年クラブの活動
(伝統舞踊を老年者向けにアレンジした踊り、着用されている黄色のポロシャツはタイ中で見かける王室をたたえるもの)

チェンマイ大学看護学部の学生と
スーテップ寺院参拝して交流